

文学館倶楽部

福岡市文学館
No.29
2019.10.15 発行

令和元年度福岡市文学館企画展

草紅葉——久保猪之吉とより江

——つまりはいつまでも夢を失はないがはの
私たちなのであらう——



開催期間

2019年11月8日(金)～12月15日(日)

福岡市総合図書館1階ギャラリー

久保猪之吉・より江の生涯を追いながら短歌・俳句・小品をご紹介します。

【観覧時間】〒814-0001 福岡市早良区百道浜3丁目7-1

【観覧時間】10時～19時(日曜・祝日は18時)

【休館日】月曜日、12月3日(月末休館日)

【観覧料】無料

【主催】福岡市文学館(福岡市文学振興事業実行委員会・福岡市教育委員会)

【後援】(公財)福岡市文化芸術振興財団

【お問い合わせ】福岡市総合図書館 文学・文書課 TEL092-852-0606 FAX092-852-0609

展示概要

耳鼻咽喉科医、歌人、俳人として知られる久保猪之吉(くぼいのきち)(1874.12.26～1939.11.12)は、青年期、苦学しながら進学した第一高等学校で、教員であり、短歌結社浅香社を主宰する落合直文(おちあいのなおみ)と出会い、短歌への道が開けます。その後、雑誌や新聞へ歌の投稿や、当時の歌界の低迷を憂い、自ら「いかづち会」を起し、革新的な提言をしました。

明治40(1907)年、京都帝国大学福岡医科大学(現九州大学)教授に任命され、来福した後は、妻より江の影響により、俳句へと傾倒しますが、生涯において短歌・俳句・評論・小品と積極的に発表し続けました。

久保より江(1884.9.17～1941.5.11)は、幼少の頃から夏目漱石や正岡子規と交流を持ち、その才能を見出されます。より江もまた、その文学活動は短歌から出発しており、与謝野鉄幹・晶子が主宰した「明星」には猪之吉と連名で歌を発表しました。

本展では、福岡における文学活動を中心に、ときに「夫婦」、ときに「文学の仲間」として創作を続けた久保夫妻とその作品を、多彩な角度から取り上げ、ご紹介いたします。



久保より江



久保猪之吉

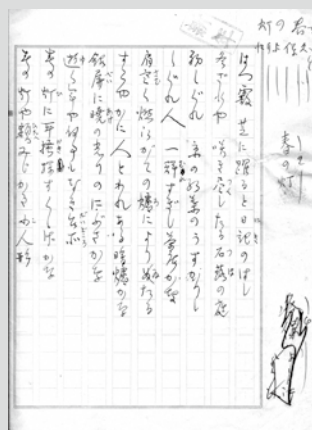
久保猪之吉・より江関係資料



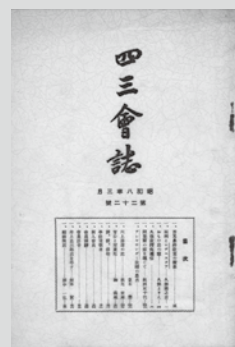
「あまびこ 第二集」
(明 38.3.3)



「エニグマ」
(大 3.6.15)
〈個人蔵〉



より江句稿
(大 13・14 頃)



「四三会誌」(昭 8.3.25)

企画展関連イベント

※すべて事前申し込み制です。

1. 企画展記念講演会(定員50名)

日時／11月17日(日) 14時～15時半

場所／福岡市総合図書館3階第1会議室

演題／「久保猪之吉・より江の短歌」

講師／恒成美代子氏(歌人・現代歌人)

協会会員)

2. 読書講座「久保猪之吉・より江をよむ」

(定員各40名)

※一回のみの申し込み可。

◆第一回

日時／11月16日(土) 14時～16時

場所／福岡市総合図書館3階第2会議室

演題／「本に棲む猫たち」

講師／大久保京氏(書肆吾輩堂店主)

◆第二回

日時／12月1日(日) 14時～16時

場所／福岡市総合図書館3階第1会議室

室

演題／「耳鼻咽喉科のパイオニア久保猪

之吉と妻より江」

講師／柴田浩一氏(医療法人浩仁会耳

鼻咽喉科 柴田クリニック理事

長)

◆第三回

日時／12月7日(土) 14時～16時

場所／福岡市総合図書館3階第2会議室

室

演題／「近角常観と文学者たち」

講師／岩田文昭氏(大阪教育大学教授)

●申込方法

「イベント名・住所・氏名・電話番号」を記入の上、11月6日(水)までに左記宛先まで、電話、FAX、Eメールでお申し込みください(一人一口)。定員を超えた場合は抽選になります。(落選者のみ連絡します。)

《宛先》

〒814-0001

福岡市早良区百道浜3-7-1

福岡市総合図書館文学・文書課

福岡市文学館担当宛

TEL 092-852-0606

FAX 092-852-0609

E-mail

library-bungaku.BES@city.fukuoka.lg.jp

講座・イベント

「定例講座」

●片山恭一講演会

期日／5月26日(日)14時～16時
講師／片山恭一(作家)
会場／総合図書館3階第1会議室
定員／100名

福岡ミュージアムウィーク2019の参加特別イベントとして、作家の片山恭一氏をお迎えした。

大学入学後から現在まで、福岡で執筆活動が続けていることや、一貫して恋愛小説にこだわって書き続ける理由、ずっと考え続けているという「言葉を届ける／届く言葉」というシンブルで、しかしとても難しいテーマについて、理系出身の作家らしい例えやユーモアを交えながら語られた。

質疑応答では、多くの参加者から熱い質問が矢継ぎ早に寄せられ、片山氏が一つ一つの質問に丁寧に言葉を選びながら答える姿が印象に残った。「世界の中心で愛をさけぶ」以降も福岡を離れず、地に



足がついた日常を大切に書き続けてこられた作家だからこそ、伝えられる言葉がそこにあった。

●「メディア都市福岡の光芒——『活字メディアの時代』が語るもの」

期日／7月20日(土)14時～16時
講師／有馬学(福岡市博物館館長)
会場／総合図書館3階第1会議室

今回の定例講座は『新修福岡市史』の特別編として刊行された『活字メディアの時代』をもとに福岡市博物館館長の有馬学氏にお話をしていたいだいた。

活字メディアは、均一な情報を大勢に伝えるシステムとして発達し、地方では独自の文化を育んだ点で、地方文化の細部を伝える貴重な資料である。博多っ子のDNAを感じさせるような、どこかクスリと笑ってしまう広告は、垢ぬけながらいい味を出し、得も言われぬ魅力となっていた。有馬氏の資料への愛情を感じながら、福岡市の出版文化の豊かさに触れる楽しい時間となった。また、会場では、「ばらす!」と題し、解体された本の部位



を並べ、本の製作過程を展示するコーナーも設けられ、来場者の目を惹いていた。

「展示」

●小企画展示「文芸雑誌の歩みI——九五〇年まで」

日時／7月20日(土)～10月30日(水)
会場／総合図書館1階ギャラリー
福岡発の本格的な文芸雑誌「エニグマ」

から無季無定型の新しい俳句を旨とした「天の川」、戦前から現在まで続く「九州文学」など、福岡の文学史を文芸雑誌の歩みで辿った。



「共催講座」

●九州文化協会主催

九州芸術祭文学カフェin福岡「佐藤洋二郎文学を歩く」

期日／8月3日(土)13時～15時

講師／佐藤洋二郎(作家)

聞き手／矢野寛治(映画評論家)

会場／総合図書館3階第2会議室

今年で50回目になる「九州芸術祭文学賞」の振興事業の一環として、佐藤洋二郎氏と矢野寛治氏をお迎えし、トーク形式で佐藤洋二郎文学の源に迫っていった。社会的弱者を多く描く作風には「弱い

者いじめや差別はだめ」という父親の教えが色濃く反映されている。また「言葉は考えを表現する道標」であるからこそ、それを適切に使う技術が必要であると、現代の日本語に対する憂いを覗かせる場面もあった。文章を書くとは「目に見えないものを掴むこと」であり、小説は「心の奥のギリギリを描くことに意味がある」と語る。佐藤氏の真摯で実直なお人柄が伝わってきた。



「企画協力」

●ポレポレ東中野主催

展覧会「上野英信の坑口」

日時／5月22日(水)～6月9日(日)

会場／Space&Catポレポレ坐

共催／ポレポレタイムス社

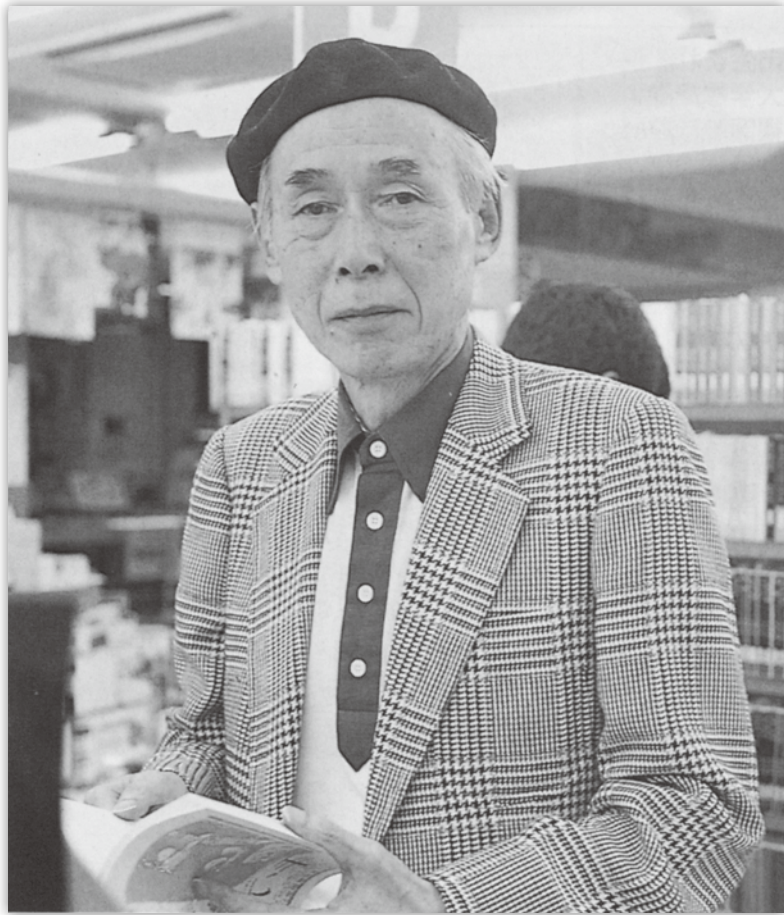
平成29年度に開催した企画展「上野英信闇の声を刻む」の企画を基に再構成した企画展が東京で開催された。



福岡の文学者

黒田達也さんの横顔

脇川 郁也



ありし日の黒田達也さん(写真提供 月刊はかた)

黒田達也さんとは何かしら縁があった。
「きつと／おだやかな一日である／みの
むしが比較的平和にぶらさがっている／
ような朝は／／わりあい正確に走るつう
きんでんしゃで／おれは隔日にビルの五

階の／行き詰まりの／窓のない事務室に
着くのである」

黒田さんの詩集『ホモ・サピエンスの
囁い』(88年)所収の作品「比較的何か」
の冒頭に描かれたビルは、九州電力を退

職した黒田さんの再就職先の印刷会社の
社屋である。渡辺通に面して立っていた、
そのビルの4階に入る子会社になくは在
籍し、タウン情報誌の編集に携わってい
た。印刷会社には、詩人の龍秀美さんも
働いており、どこことなく文化の香りがす
る場所であった。

二つの顔を持つ人

1924(大正13)年、福岡県大牟田
市に生まれた黒田さんは二つの顔を持っ
ていた。詩人として、そして九州詩史の
記録者としての顔だ。

詩を書く拠点としたのは1956(昭和
31)年に創刊メンバーとして深く関わっ
た詩誌「ALMÉE」(アルメ)だ。福岡で
発行された詩誌の中で最も長い歴史を持
ち、実力ある多くの詩人が籍を置いた。名
前はいちいち挙げないが、84年に同人の
犬塚堯が詩集『河畔の書』で現代詩人賞
(第2回)を受賞した際、最後まで競った
のは同じくアルメ同人の有田忠郎の詩集
『セヴラックの夏』であった。またアルメ
という詩誌で特筆すべきは、黒田さんが長
きにわたって定期刊行を続けてきたこと



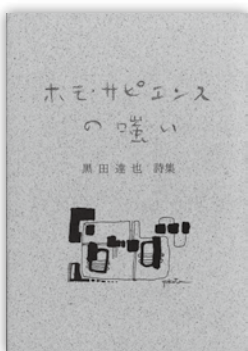
「ALMÉE」創刊号
(1956.8、ALMÉEの会)

だ。45日に1冊で、年間8冊、96年から
は年間6冊が隔月で発行され、黒田さん
が亡くなって終刊となる08(平成20)年
まで388冊が世に出た。82年には福岡
市文化賞(団体賞)を受賞している。

黒田さんは、前衛的な作風の第1詩集
『硝子の宿』(56年)をはじめ、50年の間
に9冊の詩集を出しているが、中でも優
れているのが、日本現代詩人賞、日本詩
人クラブ賞、地球賞の有力候補となった
前出の『ホモ・サピエンスの囁い』だ。

「青くかがやいて地球が回る／そうして
刻が過ぎる おれも過ぎていく／臆病なお
れは そつと／ひだり胸に掌をあてたり
して／不安な生きものの点検をする」(表
題詩1連)

詩集には、時間も空間もはるか遠くから
眺められた視線によって成立する詩群が
多くを占める。この、日常の中の歪みや
弛緩を軽妙に戯画化する手法ゆえに、描
かれている「世の無情」や、生への不安、
死の予感さえも奇妙な明るさを表出させ
る。過ぎていくだけの時間も、ただ水平
的に広がるだけの空間さえも暗鬱な予感
が奥底に沈め置かれているものとして描



『ホモ・サピエンスの囁い』
黒田達也
(1988.1、ALMÉEの会)

かれていて、読む者の心を揺さぶるのだ。

04年秋、第19回国民文化祭が・ふくおか2004が「とびうめ国文祭」の愛称で開催され、「現代詩大会」は小郡市が受け持った。小郡市で実施されている「野田宇太郎聖誕祭献詩」の選考を福岡県詩人会が担当していることもあり、当時の一丸章代表幹事からばくはその企画委員に指名された。小・中学部門、高校生以上的一般部門に分けて、全国から自由詩を募集した。主催者でもある日本現代詩人会、日本詩人クラブから最終選考委員が選出されたが、その選考委員長を黒田さんをお願いした。両団体とも、黒田さんなら異論が出ないと判断したからだ。

黒田さんは、丸山豊さんなどとともに福岡県詩人会（66年設立）、その前身である福岡詩人協会の立ち上げの中心人物だった。

ニユートラルな人

アルメの完璧な定期刊行を可能にした強い意志と緻密さが生かされたのが、記録者としての一面だ。

九州詩界の草分けともいえる大正年間からの詩人たちの足跡を記した『現代九州詩史』（64年・九州文学社）、それを基に追加訂正と九州文学に連載したものを合わせた『同・増補版』（74年・葦書房）は資料価値として超一級のものだ。87年出版の『西日本戦後詩史』（西日本新聞社）では、九州だけでなく山口・沖縄両県を



『西日本戦後詩史』
黒田達也
(1987.11、西日本新聞社)



『現代九州詩史 増補版』
黒田達也
(1974.10、葦書房)



『現代九州詩史』
黒田達也
(1964.9、九州文学社)

加え、85年までの戦後40年間をまとめている。その編集後記で黒田さんは「目を通した詩集、詩誌などは恐らく一万冊を超えたであろう」と記している。執筆にかかる前に膨大な年表づくりから始めたという。どの本も、取り上げた詩作品に對する自己主張を入れた批評眼は抑制されているのが特徴であろう。そのことに關して、黒田さんは、「詩と思想」（89年11月号）の中で詩史発行の目的を「忘れ去られていく詩集や詩誌、消えていく詩

人たちの無償の行為を記録として、通史として残しておきたい」からだと言っている。

黒田さんには、ニユートラルな人という信頼感があつた。思想や個人的な好き嫌いに頼らず、事実に基づいた判断を行動の基に置く人という認識がばくにはあつた。すらりとした長身の立ち姿で、いつもにこやかであつたが、飄々とした雰囲気の中に冷徹な眼差しを持つ横顔があつた。

◇脇川郁也（わきかわ・ふみや）◇

昭和30年生まれ。福岡市博多区在住。文芸誌『季刊午前』編集同人、詩誌『孔雀船』同人。詩集『百年橋』『バカンスの方法』『露切橋』（福岡県詩人賞）、『ピーキアホウ』（福岡市文学賞）、『靴底の青空』ほか。福岡県詩人会代表幹事。日本現代詩人会会員、日本詩人クラブ会員。

◇黒田達也（くろだ・たつや）◇

大正13年2月9日、福岡県三池郡玉川村勝立（現・大牟田市）生まれ。日本放送電株式会社九州支社（戦後は九州電力）に勤務。昭和31年8月、詩誌『ALMEE』を創刊。22号から編集発行を担当。34年5月、福岡詩人協会、41年に福岡県詩人協会の設立に参画し、両組織の幹事を務めた。

主な詩集に『硝子の宿』『LE BLANC NOIR』『時間の岸辺』『北極上空』『ホモ・サピエンスの囁い』『日本現代詩文庫・

黒田達也詩集『集落記』『幻影賦』、小説『眞夏の記憶』『人間の宿』、詩史に『現代九州詩史』『現代九州詩史 増補版』『西日本戦後詩史』など。

第15回福岡市文化賞、平成12年度福岡県教育委員会教育文化表彰、平成13年度福岡県詩人会先達詩人顕彰などを受賞。

黒田達也文庫

総合図書館図書館では、2階郷土・特別資料室に、黒田氏から寄贈された著書・雑誌を「黒田達也文庫」として収蔵しています。全国の詩人、同人誌関係者から贈られた貴重な詩集・詩誌など、全国的にも貴重な現代詩にまつわるコレクションです。館内閲覧のみ（一部書庫納）。



黒田達也文庫

福岡の文学雑誌「椅子」「木立」

若い雑木たちの椅子

昭和20年11月、荒廃の中、全国に先駆けて北九州市で詩誌「HOC(鵬)」が発行された。少し遅れて、福岡でも数多の詩誌が創刊されている。まだ名も無き詩人たちが集った小さな「場」。詩誌「椅子」「木立」は、戦後の福岡の詩史の一角にあったそんな小さなコミュニティであった。

詩誌「椅子」は、久留米の詩誌「母音」に参加していた石村通泰と詩人の萩原春子、川田禮子(芥川賞作家・森禮子の本名)、菅原純の4人によって創刊された。端切れで作った表紙、芋版による題字、謄写版と全て同人による手作りによる素朴な作りの詩誌である。創刊号のみガリ版作りではなくタイプで作成されている。このタイプは、萩原春子が打ち、菅原純が表紙の題字を芋版で彫った。菅原は美術の才があり、3号、4号に挟み込まれたドラクロアのデッサン模写は菅原の手によるものと推定される。菅原は「久富希典」名で画家としても活動している。

声高な、若さ溢れる創刊の宣言や編集後記も、目次もノンブルも、同人一覽も奥付すら特にないその誌面は、ただ純粹に4人が詩を発表するための「内輪の場所」として存在していたことをうかがわせる。

創刊号の巻末を飾る萩原春子の詩「樹蔭」におぼろげにこの雑誌のイメージが描きだされている。行き交う旅人たちに向けておかれた「ささやかな手作りの丸木の椅子」は、小さな祈りを纏っている。

斧あともそのまゝ 傷口には／密かな祈念の輪の巻かれている それら／ながい氷雪の谷で拾ひあつめられた／若い雑木たちの椅子に(樹蔭)

石村通泰の詩「舞踏」にも「やわらかな白鳥の羽ばたき」の抒情が「明日のささやかな喜び」や「新しいいぶき」を伝えるものとして響いている。

戦争の痛みを確かに記憶した不揃いで個性の異なる材で作られたその「椅子」は、互いに組み合わせると不思議と豊かなものに仕上がった。

川田禮子の詩「春」もこの雑誌の個性を伝える。「メルヒエンじみた詩」と後年評するこの作品は、川田にとってこれが初めて書いたものが活字になった出来事であったという点でも記録すべき作品である。川田の詩作は、ほぼ上京前の福岡時代に限られている。

この時期の活動は、その後のメンバーの活躍を見る時、非常に重要な時期であり、この詩誌がそれを育てた「場」であった

といえる。

二十八歳で天逝した詩人・荒津寛子が3号から加入している。荒津の作品は、「夜明けのさめきらぬゆめのやう」な煌めいた世界を歌いながらも、既にその運命を予感させるような孤独と寂寥感に満ちている。

雑誌に転機が訪れるのは、昭和25年11月。長らく休刊していた第三期「九州文学」が小島直記らによって創刊された。小島直記は、この頃、川田の住む大円寺町(現在の唐人町)に転居し、川田の隣人となった。この縁がきっかけで、川田、萩原、荒津が「九州文学」に参加。ほぼ毎号作品を掲載するなど雑誌の中核を担い、全九冊(昭和27年12月終巻)と短い第三期の歴史に詩人として目覚ましい活躍の跡を残している。

一方、「椅子」は、「意気投合しすぎて作品に対する批判が足りない」という声もあり、この機に活動の場を閉じることになった。

昭和29年末、「椅子」から「木立」創刊まで幾年の空白を経て、「椅子」の創刊同人の石村、川田、萩原、菅原の四名が「椅子」の同窓会と称して集まったのをきっかけに新しい「場」を作ることが決まった。萩原春子は、「木立」の創刊までの時期に触れて「私たちがかつて、まゝごとのような詩誌『椅子』を出した日から、漸く何かを書きはじめるようとして、この春新しく『木立』の日を迎えるまでの、

ながく、そして殆ど虚しげにさえ見えた月日」(「はなあかり」2号)と評している。

「椅子」の終盤、見えなくなってしまうた互いの方向性を「現在の流行じみた観念詩に対するひとつのレチスタンスとしてでも、私たちの新しい抒情を目標とする雑誌」(川田)と明らかにし「木立」と改題して再出発することとなった。表紙とカットの印象的なイラストは赤星孝によるもので、地行に暮らした赤星は、「椅子」同人の隣人の一人であった。再出発の気概を感じさせる創刊号は同人4人のみで構成されるが、2号には同人外からの俣野衛が「リルケ小論」を寄せているほか、前年に刊行された「安西均詩集」花の店」の誌上出版記念会の企画が催されている。それぞれに愛着の深い安西の詩について、じょうのせつこ、俣野、萩原、菅原、石村、川田らが祝いの評文を寄せている。また同号掲載の川田による「椅子」のころのこと」は、小さな詩誌の背景を伝える貴重な小文である。

「木立」までの4年の間、同人たちはそれぞれの詩の方向性を定め、成長してきた様子が誌面からも窺える。しかし、既に詩作から離れ小説の執筆へと移行しつつあった川田の上京や福岡詩人クラブによる「九州詩人」(第二期)の創刊(昭和30年11月)などの要因により雑誌の継続は困難となり、事実上2号を以って終刊となっている。

(中山千枝子)

「椅子」創刊号「昭和25年3月発行」

※全号ノンブル無・奥付表示無

「」による表記は推定値

「無題」／街／林檎／舞踏／波／雑草

石村通泰「1」6

春／松 川田禮子「7」8

断崖きりぎりにきて／片貝／落葉

菅原 純「9」11

冬陽／啄木鳥／樹蔭

萩原春子「12」14

「椅子」3号「昭和25年9月発行」

はがき

(昭和25年9月 M・I 発信 Y宛)

口絵

ドラクロア(軍馬)「模写」

静物 石村通泰「1」

潮／標本／砂上 萩原春子「2」

哀しみ 菅 マサ子「5」

紫陽花／魚

荒津0子「荒津寛子」「6」

夜光虫 川田禮子「9」

海辺にて／コスモス／窓

久富 純「菅原 純」「10」13

「椅子」2号「昭和25年6月発行」

樹／あざみ／船 菅原 純「1」3

花／五月／ぐみ 川田禮子「4」

かもめ 菅 マサ子「7」

けいりん／はなびら／岬にて

萩原春子「8」9

「椅子」4号「昭和26年1月発行」

はがき(H・H 発信 T・H宛)

口絵 ユトリロ「模写」「1」

山系／晚い秋の 石村通泰「2」4

衣裳／くらし 荒津寛子「5」9

屍 高松文樹「10」11

荒地 伊藤 章「12」14

舞踏 川田禮子「15」

りんどう 鞠子みどり「16」17

道／晩春 菅原 純「18」20

「木立」1号 木立の会 昭和30年3月10日

発行 木立の会

福岡市香椎局区内名島(石村方)

梅 夜の宰府にて／雪

眺望／径／恢復期 石村通泰「1」2

詩の周辺 萩原春子「2」6

蝶／白蟻 川田禮子「8」9

水底／壁 菅原 純「10」11

後記 菅原 純「12」

表紙・カット 赤星 孝



銃声 川田禮子 2

夏雲 萩原春子 3」5

岡／海／夜 菅原 純 6」8

十二月 石村通泰 9」10

「椅子」のころのこと 川田禮子 11

安西均詩集「花の店」誌上出版記念会

安西さん じょうの・せつこ 12」14

安西さんと詩集『花の店』 俣野 衛

花あかり 萩原春子

詩集「花の店」によせて 菅原 純

○「無題」 石村通泰

花盗人 川田禮子

表紙 赤星 孝



「木立」2号 木立の会 昭和31年1月1日

発行 木立の会

福岡市名島高又(石村方)

寄稿 リルケ小論 俣野 衛 1

文学賞の本棚から

今春より、福岡市総合図書館1階に「福岡文学スペース」を新設しました。ゆかりの文学者の作品だけでなく、地域で発行されている文芸同人誌や中々手に取ることが難しい他の文学館の図録などをご紹介します。書棚にある資料はいずれも貸出が可能です（総合図書館の貸出利用条件に準じます）。

また、「福岡文学スペース」には、福岡ゆかりの数々の文学賞の作品集や受賞作品のコレクションがあります。このコーナーでは、文学賞にまつわる資料を中心に紹介します。

福岡県詩人賞コレクション①第55回受賞作品

福岡県詩人賞コレクション

今回ご紹介する「福岡県詩人賞コレクション」は、福岡県詩人会を通じて、受賞者および福岡県詩人会会員有志によって寄贈されたものです。

「福岡県詩人賞」は、昭和41年に福岡県内の詩人組織「福岡県詩人会」の発足とともに創設されました。現在まで55回を数える伝統ある賞で、会員資格を問わず、福岡県下で発行された詩集を対象に選考するという「開かれた」詩人賞です。受賞者の中からは、活動の場を全国に広げた詩人や、その後全国的な賞を受賞した詩人も数多くいます。今回は、第55回県詩人賞を贈られたフレッシュな2冊の詩集を受賞者本人にご紹介いただきました。



『コロンビーナの口紅』
サラ・カイルイ
(2018.10、私家版)

彼女の口紅 わたしの言葉

サラ・カイルイ

平成三十年、わたしは二冊の詩集を私家版で発表しました。私家版という手段も友人らに教えてもらったばかりで、右も左もわからず、一作目は周囲に迷惑をかけながら作った覚えがあります。そんな体たらくでありながら、二作目を作ろうと思いついたのは、まだまだ一作目で



は表現のレベルが足りなかったからです。一作目「リード・マイ・リップス」は、わたし自身に近いものでしたが、次作ではより虚構性や物語性をもたせたいと考えました。そうしてできたのが、「コロンビーナの口紅」です。

そもそも、コロンビーナとは？

コロンビーナとは喜劇に登場するヒロインの名前です。（が、わたしが好きなオペラ「道化師」ではコロンビーナを演じる人妻が、不倫の末、夫に刺殺されます。喜劇と悲劇、現実と虚実、さまざまが入り乱れ彼女の口唇は赤く、流される血も赤いのです。）

わたしはこれまで詩の題材として主に性愛を扱ってきました。生きていく上で、

【受贈報告】

2019年2月1日
2019年8月29日

◆1階文学館スペース（貸出可）

●2階郷土・特別資料室（館内閲覧のみ）

◆青嶺／2019年3～8月号／俳句

◆あまのがわ（湯布院発）／第258～259号／俳句・解説・随筆他

◆海第二期／第22号／小説・詩・俳句・随筆他

◆GA（が）／83号／俳句・解説・随筆

◆海峡派／第145号／小説・詩・短歌他

◆GAGA（ガガ）／No.74～75／詩・随筆

◆季刊午前／第57号／評論・小説・随筆・詩

◆九大日文／第33号／評論

◆玄海／2019年2～8月号／俳句

◆光円／2019年春号・夏号／俳句・評論・随筆

◆さきがけ／第8号／詩・俳句・随筆他

◆朔日／2019年3～8月号／短歌・随筆・評論

◆詩誌 侃侃／2019年No.31／詩・随筆

◆詩誌 无／第22～23号／詩・評論・解説他

◆詩と眞實／No.837～842／詩・小説・随筆他

◆紋説第三期／第16号／評論・批評

◆自鳴鐘／2019年2～8月号／俳句

◆聖水島／Vol.59／詩

◆川柳くすのき／第129～130号／川柳

◆空／第83～85号／俳句・随筆

◆第七期九州文学／2019年春・夏号／小説・詩・随筆他

◆筑紫山脈／第35～36号／随筆・小説他

◆筑紫野／第145～150号／詩

◆チクタク／第151～152号／俳句

◆飛梅／第80号／随筆・紀行文他

◆どんたく／第321号／川柳・随筆

◆南風／第45号／小説・随筆

◆波濤／2019年2～8月号／短歌・随筆

最もリアルで手応えがあり、四つに組むにこれほど適した相手はいなかったからです。生きることの本質は、^{まわ}嬉うことでした。痛み、喜び、葛藤、あきらめ。

どうしたって、わたしは人間として目一杯生きたいと思っていますようです。

まわりに迷惑をかけつつ、こりないわたくしは今年の秋に第三詩集を発表する予定です。

連作詩集の形をとった、「メリー・カゴシマ」というタイトルの詩集です。どちらかというと小説に近い詩で、わたしとしては新たな挑戦でした。こちらは、「文学フリマ福岡」等で販売する予定です。

まだまだ至らないところがありますが、手探りで自分を成立させた第一歩の作品が私家版の二冊、「リード・マイ・リップス」と「コロンビーナの口紅」でした。この二冊が評価されたことは、大きな後ろ楯となっています。

◇サラ・カイリイ◇

1986年生まれ。著書に詩集『CHAOS』(文芸社、平成16年)、詩集『リード・マイ・リップス』(私家版)、詩集『コロンビーナの口紅』(私家版)がある。福岡詩話会/福岡ポエトリー参加、「福岡ポエイチ」実行委員会。「季刊午前」在籍(平成21-24年)。福岡県詩人会会員。現在福岡市在住。



『明け方の狙撃手』
夏野 雨
(2018.11、思潮社)

時間の化石がコロコロ

夏野 雨

時間って何だろう。ふと、考えることがある。いまこの瞬きのあいだにも、過ぎていつてしまう時間。それはどうにもとらえようがなく、少しの間止めて観察する、ということではできない。わたしたちはそれを、太陽の位置によって知る。または時計の針や、食事の回数によって。あるいは子どもの背の高さによって。でもそれはほんとうに、時間の正体なのだろうか。たとえば地下鉄天神駅の、黒い石の手摺りに化石として眠るサンゴは、もう食事をとることもないし、その枝を伸ばすこともない。それでもそれはいつかの時代、海の底に揺れるサンゴの森があったということ、わたしたちに教えてくれる。遠い波の呼吸とともに。いま、わたしたちの生活のなかにも、ふるい時間の束が息づいている。それは化石や物など、直接目に見えるものかもしれないし、目には見えず、手にとることはできないものかもしれないけれど、過ぎた時間は失われず、かたちを変えて、

わたしたちと同じときを、いまも生きているのだと思う。そんなことを考えながら、この詩集をつくったように思います。そして福岡や、少し離れたところに住んでいる友人たちや、いままで見てきた風景や、伝わっているたくさんの物語や映画や音楽の、いろんな声が、エコーみたいに響いている、そんな本であればいいなと思っています。そのように制作した詩集を、こうしてとりあげて頂いたこと、とても光栄に思います。本は思考の化石です。でもそれだけではなく、文字や、言葉や、紙の間に、私個人のものだけではない記憶、つまりサンゴにたとえるならば波の部分を閉じ込めて、いまここにあるものです。いま私が書いているこの文字も、詩集も、図書館の海に眠ることになるのでしょうか。それをともうれしく思います。出来立ての化石を眺めるように、読んで頂けたら幸いです。

◇夏野雨(なつの・あめ)◇

1978年生まれ。福岡県飯塚市出身。大学にて社会心理学を学んだのち、関東近辺で俳優として活動。2010年、詩のオープンマイク「福岡ポエトリ」を立ち上げ現在まで継続。ポエトリフェス「福岡ポエイチ」初代代表。2018年、第一詩集『明け方の狙撃手』を刊行。現在福岡市在住。

◆◆葉(ひこばえ)◆第8号/詩・俳句・小説他
◆ひびき◆2019年3月1日号/小説随筆・詩他
◆◆串弥呼◆2019年春季・夏季号/俳句・随筆

◆◆笛◆151号/152号/川柳

◆◆福岡県詩人会◆会報/No.173/174/会報

◆◆冬野◆2019年2/7月号/俳句

◆◆ふよう◆第48/53号/俳句

◆◆文芸ごきんじょ◆2017・2018/文学情報提供

◆◆文献探究◆第57号/評論解説

◆◆水城野◆2019年3/8月号/俳句

◆◆南の魚座◆Vol.2/随筆・短歌

◆◆南の風◆第84/87号/五行歌・随筆他

◆◆百道原◆第47/48号/随筆・紀行文・小説他

■総合図書館HPで文学スペース・特別資料室で受け入れ中の文芸同人誌の一覧表を配布しています。ご利用ください。
<http://toshokan.city.fukuoka.lg.jp/subscriber/>

文芸同人雑誌の収集について

福岡市文学館では、福岡都市圏(福岡市周辺の17市町村:宗像市、福津市、古賀市、新宮町、久山町、粕屋町、篠栗町、志免町、須恵町、宇美町、春日市、太宰府市、大野城市、筑紫野市、那珂川市、福岡市、糸島市)で定期刊行されている文芸同人雑誌を収集しています。都市圏で活動している同人雑誌等団体で寄贈いただけるものがございましたら、総合図書館文学・文書課宛にご送付ください。



文芸イベント

「ちよこつと文芸福岡」



文芸はきつと、もっと面白い
若者を中心に文芸イベントが広がりを見せる福岡で、私は更に間口を広げるべく新たな文芸イベントを立ち上げた。「ちよこつと文芸福岡」だ。

多くの文芸イベントが即売会メインであるのに対し、「ちよこつと文芸福岡」では展示系コーナーに力を入れている。学校活動の一環として文芸活動を行う団体の文芸誌を展示する「学生文芸展」と、一枚の紙を折って8ページの本にする「paper



折本フェア

line（通称・折本）を展示する「折本フェア」だ。「憩いの場からつなぐ」をテーマに、一人でも多くの新規参入者が「文芸は面白いんだ」と思える空間づくりを目指す。

もともと私は、「さががけ文学会」として同人誌活動（「ひこばえ」「さががけ」）を行っている。平成29年9月からは文芸同人情報誌「文芸ごきんじょ」を立ち上げ、公と民間を問わず、福岡ゆかりの文学の場所を紹介するようになった。

20代の時に高齢化が進む同人誌の世界に足を踏み入れた私は、常に手探り状態で、新しく知識を手に入れては文芸仲間と共有する日が続けていた。こうした中で、これはもう一冊の本にしておいた方が良いのではないかと思い立ち、まとめたものが「文芸ごきんじょ」である。

そんな情報を追っていく中で、学内だけで作品発表する文芸部の青年や、ツイッターのただけで作品発表する青年と、話す機会を得た。彼らに「どうして今ある文芸イベントに出てこないのか」と尋ねると、いつも似たような回答が返ってくる。主に「学内予算で活動している為、販売行為ができない」「一冊の本にできるほど作品が書けない」という環境的なもの、「私がやっているのは『文学』と呼べるほど立派なものではない」という心理的なものだ。こうしたやりとりを重ねるうち、私は義憤とも好奇心ともいえない衝動を感じるようになった。

立派だと言われる文芸作品は存在しても、文芸そのものは立派である必要はない。そういった物差しが、傷つきやすい青年たちの発表意欲を削いでいるのではないか。そんな気持ちが積み重なった結果、平成30年、遂に文芸イベントの立ち上げに至った。

切磋琢磨という物差しで磨き合う世界は大切だが、まずは文芸という行為そのものに肯定的な体験をしてほしい。「好き」



学生文芸展

というシンプルな感情は、その後の研鑽において重要な支えとなる。「ちよこつと文芸福岡」は「通過される安全基地」なのだ。

作品の発表方法や場所に対するニーズは常に変化している。発表の場を作る者として常にその変化に注視し、対応していかなければならないと考えている。「ちよこつと文芸福岡」は、今後も様々な角度から挑戦していく予定だ。

（「ちよこつと文芸福岡」代表 馬場陽子）



文芸同人誌の頒布即売会

文芸イベント「ちよこつと文芸福岡」

創立／2018（平成30）年8月

開催／年1回（8月下旬）

会場／天神チクモクビル

内容／文芸同人誌の頒布即売会、学生文芸展・折本フェアなど

連絡先／福岡市城南区松山1-9-18

目黒方 ちよこつと文芸福岡

実行委員会（担当・ハバ）

HP: <https://chocotobun.wixsite.com/kame>

インフォメーション

2019. 3 ~ 8

Person

● 帚木蓬生氏、小都市文化大使に任命(5月12日)

九州大学医学部出身の医師で作家の帚木蓬生氏が、「小郡ふるさと文化大使」に任命された。これを記念して、小郡市の野田宇太郎文学資料館で特別企画展「帚木蓬生久留米藩三部作の世界」(5月12日~6月11日)が開催された。

● 村田喜代子氏、第55回谷崎潤一郎賞を受賞(8月19日)

芥川賞作家の村田喜代子氏が離島に暮らす二人の老女の生活を描いた小説『飛族』(文藝春秋社)で第55回谷崎潤一郎賞を受賞した。

1J-J Event

● 第5回「大学短歌バトル2019 学生短歌会対抗 超歌合」開催(3月2日)

第5回大学短歌バトル(主催:角川文化振興財団)が東京千代田区飯田橋の神楽座で開催された。全国の大学短歌会から公募予選を勝ち抜いた8団体が揃い、

福岡からは、「teamTOKUGAWA(福岡女子短期大学ほか)」と「九大短歌会」が会場。日本古来の文芸競技「歌合」で短歌の腕を競った。最優秀念人(II評者)をteam TOKUGAWAの落合きり氏(「九大短歌会」・「九大俳句会」)が受賞した。また、判者による4つの特別賞のうち「佐佐木幸綱賞」を神野優菜氏(九大短歌会)が、「穂村弘賞」を長友重樹氏(「九大短歌会」)が受賞するなど福岡勢の躍進が目立った。

● 第49回九州芸術祭文学賞決まる

第49回(平成30年度)九州芸術祭文学賞最優秀作に平田健太郎氏(沖縄県)「兎」が選ばれ、3月16日、大分県総合文化センターで平成30年度第49回九州芸術祭文学賞の表彰式が行われた。芸術祭文学賞の最優秀作は、文藝春秋社刊行の「文学界」(平成31年4月号)に掲載される。福岡地区からは34編の作品が寄せられ、地区優秀作には濠井無優一(井無田ゆういち)氏の「男のはなし」が選ばれた。

● 第1回笹井宏之賞決まる。(3月3日)

平成21年に26歳で夭逝した佐賀出身の歌人・笹井宏之の名を冠した短歌の新人賞「笹井宏之賞」(主催:書肆侃侃房)が発表され、第1回大賞受賞作に柴田葵氏の作品が選ばれた。大賞ほか受賞作は同社刊行の短歌ムック「ねむらない樹」(Vol.2)に掲載された。

● 第54回福岡県詩人賞決まる(5月12日)

サラ・カイリイ氏「コロンビーナの口唇」(同氏は第49回福岡市文学賞受賞)と夏野雨氏「明け方の狙撃手」(思潮社)が受賞。先達詩人賞は、小野山紀代子氏に贈られた。

● 古川真人氏、161回芥川賞候補(6月17日)

福岡市出身で第一薬科大学附属高校の卒業生である古川真人氏の「ラッコの家」(「文学界」掲載)が第161回(令和元年上半期)芥川賞の候補に挙げられた。古川氏は、第156回「縫わばならん」(平成28年下半年期)、第157回「四時過ぎの船」(平成29年上半年期)に続いて三度目の候補となった。

● 辻仁成氏「真夜中の子供」の映画ロケ始まる(7月8日)

中洲を舞台に無戸籍児の少年が山笠を通じて大きく成長していく姿を描いた芥川賞作家の辻仁成氏の『真夜中の子供』(河出書房新社)の映画(原作・監督:辻仁成、令和2年公開予定)の市内ロケが始まった。本作のハイライトとなる山笠のシーンは、山笠の期間中、中洲流れの協力のもと、大規模なエキストラを使って行われた。

● 夢野久作の未発表書簡発見(7月12日)
仙台文学館で、夢野久作全集未収録の書

簡2通が発見された。作家・編集者の佐左木俊郎に宛てられたもので、後に「ドグラ・マグラ」となる長編のタイトルや自身の作品について触れている。書簡の概要は、国書刊行会から刊行中の『定本夢野久作全集』6巻月報で報告された。

● 東潤の直筆原稿発見(8月6日)

長崎原爆後、最初の報道記録とされる詩人の東潤による「原爆の長崎ルポルタージュ 浦上壊滅の日」の直筆原稿が市内在住の遺族宅で発見された。東氏は8月9日の原爆投下翌日に日本陸軍の西部軍報道部員として長崎市入りし、その惨状を克明に記録した。「原爆の長崎ルポルタージュ 浦上壊滅の日」は、昭和27年発行の写真集『記録写真 原爆の長崎』(第一出版)に一部発表され、30年の「九州文学」8月号に全文掲載された。

● 第2回「ちよこつと文芸福岡」開催(8月25日)

福岡発の文芸イベント「ちよこつと文芸福岡」の第2回が天神チクモクビルで開催された。

Book

● 文学ムック「たべるのがおそい」終刊(4月15日)

文学ムック「たべるのがおそい」(書肆侃侃房)が惜しまれつつ第7号(4月15

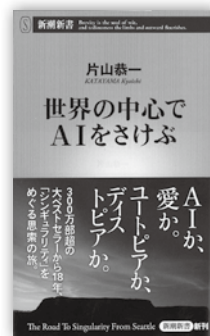
日発行)をもって終刊となった。同ムックは、作家・今村夏子氏が再び筆を執った「あひる」(のちに第155回芥川賞候補、河合隼雄物語賞受賞)が掲載されたことでも話題になった。書肆侃侃房では来年4月に同ムックに続く文学ムックの創刊を準備中とのこと。福岡から全国へ地方出版社の挑戦を期待して待ちたい。



「たべるのがおそい」
(2019.4、書肆侃侃房)

●片山恭一『世界の中心でAIを叫ぶ』刊行(7月12日)

5月に当館の講座でお話いただいた片山恭一氏がAI哲学に関する新書『世界の中心でAIをさげぶ』(新潮社)を刊行。同書は昨年訪ねたアメリカ西海岸での旅をまとめたブログを基に、近年、氏が強い関心を寄せているAI技術やシンギュラリティ(技術的特異点)など、テクノロジーを哲学する文学者の視点が新鮮な一冊となっている。



『世界の中心でAIをさげぶ』
(2019.7、新潮社)

▶ 訃報

■山笠井喜美枝(やまのい・きみえ)(昭和5年2月5日〜令和元年6月18日)

本名：廣津喜美枝。昭和31年未来短歌会入会。34年未来第三歌集『風炎』に参加。標土賞受賞、50年未来賞受賞。福岡市文学賞第10回(昭和54年度)(短歌)受賞。同文学賞に於いては、第17回(61年度)から47回(平成28年度)まで短歌部門の選者を務め、本市の短歌の発展と後進の育成に尽力した。福岡市文化賞第26回(平成13年度)(短歌)受賞。主な著書に歌集『やぶれがさ』(短歌新聞社)『多々良』(短歌新聞社)などがある。

■佐渡谷重信(さどや・しげのぶ)(昭和7年1月31日〜令和元年8月14日)

西南学院大学名誉教授。アメリカ文学史、比較文学研究者。西南学院大学文学部講師から助教を経て昭和47年から平成14年まで同学部の教授を務めた。福岡市文学賞第15回(昭和59年)(小説・評論)受賞。主な著書に『鵬外と西欧芸術』(美術公論社)『アメリカ精神と近代日本 森有礼から三島由紀夫まで』(弘文堂)などがある。



福岡市文学館

福岡市総合図書館

- 閲覧(貸出可) 1階福岡文学スペース
- 閲覧(館内のみ) 2階郷土・特別資料室
- 展示 1階ギャラリー

福岡市早良区百道浜3-7-1
TEL092-852-0606 FAX092-852-0609

- 開館時間／午前10時〜午後8時
(日・祝日は午後7時まで)
- 休館日／毎週月曜日(祝日の時は翌日)、
月末日(日・月・祝日の時は翌日)

<http://toshokan.city.fukuoka.lg.jp/>



福岡市文学館選書

福岡市文学館では、福岡ゆかりの文学作品で、絶版や未刊行により現在読むことが難しい作品を皆様にご紹介する「福岡市文学館選書」を刊行しました。これまで全6冊の選書を刊行しています。

選書1『黒田如水』福本日南著

解説：石瀧豊美(歴史研究家)
定価 1500円＋税
制作・発売 海鳥社(1〜4まで)

選書2『中野秀人作品集』

解説：田代ゆき(福岡市文学館嘱託員)
定価 1800円＋税

選書3『那珂太郎はかた随筆集』

解説：三浦雅士(文芸評論家)
定価 1500円＋税

選書4『竹下しづの女・龍骨句文集』

解説：野中亮介(俳人)
定価 1500円＋税

選書5『矢山哲治一詩と死一』

解説：近藤洋太(詩人・文芸評論家)
定価 1600円＋税
制作・発売 書肆侃侃房

選書6『久保猪之吉・より江作品集』

解説：神谷優子(福岡市文学館嘱託員)
定価 1500円＋税
制作・販売 花書院

販売は総合図書館3階事務室文学・文書課、または一部書店でもご購入いただけます。遠方の方は通信販売も行っておりますので、お問い合わせ下さい。
福岡市文学館担当
TEL 092-852-0606
092-852-0609

